

文学としての『応答の諸形式(仮題)』——原作に替えて

六幕構成

著・左門 左兵衛

第一幕 天命—神降しの「能楽囃子」から—ETUDE2—前半—

(※)

第二幕 その子は潜伏した テロリストのように —ETUDE2—後半

第三幕 仲裁と不和の予兆 「男」の登場 —NewWorld—

第四幕 「男女の癒着」と闘争 —MassMan—

第五幕 私が生きる事を邪魔するな！

夕闇と光—地獄の門—Nagoyatsi—

第六幕 死出の旅と希望は同じものだ 世界建設は出来なかったけれど
—Etude5—からリズムセッション

——補足——

今回の製作では「舞踊構成」から全てを作る手法を取った。物語を舞踊化するのはなく、舞踊から物語を作る。よってこの原作は『応答の諸形式・舞踊構成』を文学化したものとなっている。コロナ禍中に執筆していた連作詩を導入し、製作者・出演者に作品内容をより理解してもらおう為の一助として書き下ろした。

(※)「天命」朱熹によると、天に存在する宇宙の摂理である「理」が地上に下されると「命」、つまり「天命」となる。ここでは、全てが生起し続ける有様を摂理として捉え、その摂理を地上で実現させる意図を「天命」として記述している。

○第一幕 天命―神降しの「能楽囃子」からETUDE2

衣服を正した男たちが集い、決まった動作を定まった順序で静かに繰り返す。何かの儀式を執り行うように。ヒトの想いが消えたこの世界で彼らは何かを願っている。

男3名「水面に浮き上がる泡のように姿を表す。『その子の願い』は必ずこの世界に浮上する。だから、私はあらゆる要素を集め「様式」を与えよう。動きと形を整え、人の心が息を吹き返し、人の心と体と世界が調和し融和し始めるのを待とう。『その子の願い』は、同時に、私の願いでもあるからだ。」

——その子の願い(音楽 #Etude2 前半)——

「花火がスパークしたその後に、姪っ子のキラちゃんは、いつも、はしやい^ハで変な踊りを踊る。花火が弾けている時は、子供の癖につまらなそうな、人を小馬鹿にしたような顔をしているのに。でも、燃焼する火薬の残火が弧を描いて掠れて消えて、すり減らされていくと、キラちゃんは目を輝かせる。子供らしいキラキラした瞳で。隣にいる私みたいなバアさんは早く弾けて消えればいいのに、とこの子は心の何処かで思っているのかもなと私はニヤける。私が唯一尊敬するキッズ・キラちゃんはずるずるに伸びたタンクトップを纏った、セクシー破壊神だ。

でも、私が崇拜するキラちゃんでも知らない事がある。子供では、絶対に気付け無い何か、私の心に引っ掛かり喉に絡んだ唾のように、私

の肺を真っ黒にしていく。

この宇宙がスパークするには——爆発し蒸発して、全てを作り直すには——こ・こ・に・み・ん・な・が・い・る・必要がある。これまでにあったものが、全て、何らかの形で、こ・こ・に存在しなければならぬ。一つでも不在ならば、世界は閉じたままだ。やり直されることなく作り直される事もなく——無言の中で——世界は静かに息を引き取る。逃げたままなんて、許さない。ちゃんとしてこに来て、みんな、一緒に壊される！コメカミや後頭部がズキズキ痛むのを感じながら私は心の中でそう叫んでいた。：頭のとっぺんが変な感じ。多すぎる髪にウィッグつけたみたいで首が重い。それでも、何事もなく毎日はすぎる筈だった。」

○第二幕 その子は潜伏した テロリストのように

—音楽 Etude2後半—

キラちゃんを病院まで送ってから家に帰ると警察署から家電。お母さんが出たから最悪。頬を膨らませて威嚇される。マミーの友達のミキちゃんまで来てオロオロ、涙目で騒ぐ。チモは初犯。私のスマホは警察署。腐った枝から葉っぱがバラバラ落ちるみたいに、あいつらの顔と言葉がのしかかってくる。私だけが「犯罪者」なのは、おかしい。チモは逃げ出して、どこにいるのか分からない。チモもこの人たちも、優しいんじゃない。ただやなくて、幼稚なんだ。私にとって、こいつらは、役に立たない。ただ騒いで、困ったら怒って誤魔化して最後はいつも逃げるだけ。だから私は、いつもこんなに寒いんだ。怯えてる場合じゃないのに、やらないといけない事があるのに、私の心は怒りでこうしてバイブってる。この人

たちは私を取り囲んで歌い続ける。踊ってるみたいに美しく。あの△愛▽のように。

女B…色んな世界を知っていた。曇ったり晴れたりする空。濃い色の絵の具が染み込んで濁ったみたいなの、妙な顔をした男も。色々あったけど、あなたが知っているSNSの動画よりも生々しくて愛らしかった。だから、ここで私たちは息をしている。それは—美しいこと。その美しさは、いつか誰でもが理解できる。あなたも、あなたの友達も。きつと、みんながわかり合える。

女C…色んな人が描いていた空。それが、私が初めてみたあの部屋の天井。ステンドグラスで作った肖像画みたいにキラキラしていた。色んな色が混じって、それはもう人の顔ではなかったけれど、なんだか見覚えがある。だからって安心もしない。だからって憎みもしない。一つだけ、私知っていること。それは、私がここに生きていて、誰にも、私の心は捻じ曲げられない。少なくとも、私の心の中では。だから、あなたも分かる。私も理解したように。悲しんだり自分を傷つけたりする必要はないんだって。

○第三幕 仲裁と不和の予兆。「男」の登場 —音楽NewWorld—

チャイムが鳴る。「男」たちがやって来た。

男B「あの子の母親は子供の頃から・・・よく知っている。汚れているわけでも間違いがあったわけでもない。でも、あの時は助けられなかつ

た。ここに来たのそう思うからだ。どんな子供にも、願いはある。だから恥を晒してでもここに来た」

男C「嫌です、て言われてたらしいね。でもここに来たよ。どんな事にも仲裁者は必要だから」

ミキちゃんの旦那や、マミーの兄弟まで来て妙な『祭り』が始まった。男祭りなんだか、乱交フェスなんだかよく分からない。クリーンなお友達とファミリーたち。マミーやミキちゃん達は『変な目つき』になって騒ぎ始める。イロボケ・モンキーズ。誤魔化せると思っているのがダサすぎる。

・・・私は、震えている。

チモの口癖は「世界を建設し直さなければならぬ。君は女神」だった・・・。あいつが言っていた馬鹿げた独り言のゼンハン部分だけが、いま、何故だか、私の胸の真ん中で鳴り響く。切なく、はしたなく。このこめかみを切り裂くように。でも、それは偽物バイブレーション。チモはガキだからおもちゃ好き。これは、単四電池で動くちっちゃくて心細い、あのチープなモーター音。

○第四幕 「男女の癒着」と闘争 —音楽 MassMan—

次第にその熱狂はいつもの罵り合いに変わる。時代や国が変わってもいつもくり返して来た、あれ。彼らは、相互に「ボタン」を押して、ス

ロツトルを回す。3LDKの壁の隅で子供がうずくまっけていても構う気配はない。各々の欲望が許されている享楽場がここだと言わんばかりに。人の心は、こうして所々がいつも壊死している。

男「昔から何を言っても、つまらなそうな顔をする女だった。馬鹿にしているわけではないんだと思ってきた。でも違った。こいつらは、なんでも馬鹿にする。積み上げて来たものを、いくらでも、その時の都合で、嘲笑えると思っっている。」

女「男はバカだからそこら中をはい回って、下手くそな嘘と屁理屈を振り回す。具合の悪そうな顔をして腰を振るだけしか能のない、む・し。信用・・・面白ろーいハハハ。あれは適当に口裏を合わせて、私達が成り立たせてやっていただけの作り事。あいつらは、政治を使っけていつも私達のここを不具にする。」

男「それは『愛』と人が言うものだった。多くを守ろうとして、多くが死んだ。死に絶えて滅ぶものが『愛』なのか？彼女達は、そうせせら笑う。では何の為に戦ったのか？何の為に耐えたのか？私達には『女』なんかいらぬ。ただ、答えが欲しいだけだ。」

椅子取りゲームのような彼らの狂騒。みんな、何かを欲しがっている。欲望の取り分が減ることを恐れているように。それによって、自分の人生の価値が損なわれると思ひ込んでいるかのよう。

・・・だが、ある女が我に帰る。呆れて、白けて、馬鹿らしくなったのだろう。酩酊したような足取りでふわりと△その子Vに近づき力無く抱きつく。囁くようにこう言った。

女B「こんなん、本当は聞く必要なんかない。見なくたって、いい。感

じなくても、いい。これは、もう、あなたのことでも、私のことでも、もう、私たちのこと、Vですらないんだから。」

○第五幕　私が生きる事を邪魔するな！　幻想は世界と戦う

夕闇と光―地獄の門・音楽―Nagoyatsi―

倒れて吐きそうだ。やばい。困った。あの変なおじさんも頭の中に出てきた。『人類の未来のためだっ』とか私の脳内で騒いでいる。いつもレツドブルで頭の中に出没する変なじーさん。私の頭を支配するビョーキ男。人工甘味料と安カフェインが作り出す幻覚だ。肝心な時に、役に立たない。こうやって、私を苦しめるだけだ。私と世界を救うはずだったのに・・・そう、あいつも、偽物だ・・・。チューニ病の腰抜けチモと大差がない。何が、世界のためだ！何が、私達のためだ！全部、デタラメじゃないか！信じていたのに！出鱈目じゃないんなら、これを説明してみる。この腐っ・た・大・人・達に注射をつけて、ちゃんと分か・る・よ・う・に説明しろ！お・で・こ・に値札シールを貼付けて、こいつらの本当の値段を言ってみろ！

彼女はこう叫んでいだ。

「みんな同じ事を言う。上手く立ち廻れって…。人を騙して得すればいいんだよーっ、て。お父さんもお母さんも、じいじいやばあもそう言う。でも、それで、世界が、腐っ・た・ん・だ。だから・こいつらはいつもこうして罵り合ってる…だから・私はいつもこうしてブルブル震えて、バイブってる…でも・・・このま、震え乍ら終るなんて違うん

だ。絶対に、違う。それなら…」

・・・私には言いたいことがある。

△その子▽は目を剥いて頬を上気させ、立ち上がったけれど、そのまま卒倒した。横にいた女が発狂したように騒ぎ始める。「もう、いい加減にしてよ！この子は病室で、こう言っていた。この子から私は直接聞いたんだ！みんな、病室になんかロクに来なかったじゃないか！」その女は激しい身振りで語り始めた。△その子▽が語っていたと女が絶叫した内容は、以下の通りだった。

——その子の日記からの抜粋——夕闇と光

「ここにあるのは夕闇だ。きつといつか終わる夕暮れ。ショーツに沁みたアーモンドテイストの血の色だ。

赤くて黒い液体が、太ももに伝わって気持ち悪かったけど、ここまで歩き続けて来た。大きな歩道橋とトイレのある、ここまで。LEDに照らされたり、硬い信号機に怯えながら。ピカピカ光ってたあれは、結局、全部汚いトラップだった。楽器を鳴らされて、すごい形のスピーカーで腰を振ってよがって寄ってくるダンサーたち。あいつらと、変な色の「ドリンク」を飲んで同じ事をしろと言われたけど、私はそんな変だと思ったから『ノールック』でここまで来た。でも、最近、分かったんだ。結局、何もないんだって。おばあちゃんとその友達が、どんなに『努力』するといよいよって言ってみても、結局、ゲームみたいにチャリーンって音がして、『課金』して凄いいアイテムが落ちてくる事なんて

ないんだって。最初から『アイテム』を持ってなければ、Egoみたくにいつも負け続けて破かれ、トイレの雑巾みたいに、汚いものとして捨てられるだけなんだって。

色んな薬を飲み込んで、何度も救急車で運ばれた。病室で縛りつけられながら、私はキラキラした、でも静かな「光」を見ていた。いつか終わると思っていたあの光。そう・・・私も、死ぬんだって。こんな綺麗な光はなかった。だから、私はようやく・・・終われるんだって思った。・・・でも、ここでそうなのは違う。こんなかわいくない管と、友達でもない白衣の偽善者ゲスと友達ごっこをして終わるのは、違うゼツタイに違う。もっと、違う終わり方が、ある筈なんだ。」

—地獄の門が開かれた—

○第六幕 死出の旅と希望は同じものだ—世界建設は出来なかったけれど

音楽—Eudes—からリズムセッション

その狂騒の後、大人達は次第に疎遠になった。それを見計らったかのように、^その子Vは再び潜伏した。だがその潜伏の仕方は、それまでとは異なるものだった。彼女は極力、人目を避けて、静かに息をすることに集中した。そして、ある時、^真実Vに到達した。

—その子の日記の抜粋2—

「・・・キラちゃんが、悲しむ顔を見たくない。わたしみたいに。みんな、すぐにそうなるから。いいのは最初のうちだけ。みんな、すぐに淀

んだ眼になって、人の足を引っ張って喜ぶようになる。だから、全員をここに集めて、やり直したかった。謝らなくなっただけいい。ただ、戻ってきて、顔を見せてくれれば、なんとかかできると思っていた。でも、案の定、私は失敗した

傷ついて破れて捨てられたけど、少し、分かった気がする。・セカイ、なんかなくなっただけで、本当は、もっと、色々感じて、色々挑戦して、色々ジュージツして・・・生きれるんだろうって。

色々な計画を捨てた。頭のおかしい男たちの設計図も含めて。それらはピカピカしていてそれらしいけど、ヒトを傷つけるだけの凶器でしかなかった。それは、本当の狂気だった。あいつらは、まとめて、まちがっていたんだと、今は思う。

難しい子って皆んながいうキラちゃんが、わたしのヒーローで教祖様だったみたい。私達は、もうそんな無邪気な樂園には戻れない。一切、戻れない。キラちゃんだって、すぐに大人になる。私たちと一緒に、つまらない肉の塊になる。でも、そんなことはどうでもいい。わたしがいま、ここで、息をして脈打って、時々変な脈になってあつぷあつぷしても、それでも私はいちようして生きている。らしい。そ・れ・で、い・い・ん・だ。多分、それで、いい。過去や未来、歴史や展望も私には――関係がなかった。本当は誰にだって、関係がない。親の人生ですら、子供には関係がない。あいつらの問題は、あいつらにセキンを取らせるしかない。私達が代わりにそれをして、何の意味もなかった。世界は変えられない。次第に悪くなるこの廃墟の中で、わたしたちはいつも静かに息をしていただけだ。

今、私が見ているこの景色だけしか、私には、命がない。ボロボロになって、ヨレヨレになって利用されても、いま、私が見ているこの風景だけが、ここにある。この景色の中で、私は息をする。それが・・・それ

だけが、生きてることなんだって、ようやくわかった。

それがこの世界に対する本当の抗議なんだ。わたしが、ここに生きている。それだけが、全てだった。なんで、みんな、それを言わなかったのだろう？ どうしてそれを教えてくれなかったのか？ いま、私はようやく静かに息を吸って吐いている。いつかこの鼓動が終息するまで。」

彼女の心臓は、再び鼓動し始めた。

終